



Title	土屋 博著「聖書の中のマリア」(教文館, 1992年)
Author(s)	大道, 敏子
Citation	基督教学, 29, 35-40
Issue Date	1994-07-05
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/46553">https://hdl.handle.net/2115/46553</a>
Type	other
File Information	29_35-40.pdf



## 土屋博著 『聖書のなかのマリヤ』

(教分館、一九九二年)

大道 敏子

様々な新しいマリヤ論の登場は、まるで輸入を自由化された食材が、料理人たちの手によって次々と趣向を凝らした料理へと生まれ変わる様にも似ている。

しかし、これら「マリヤのヌーベル・キユイズイヌ」が食卓を賑わせば賑わすほど、その一方で、今度は元来の素材により近く、より簡素な料理に食指が動きはじめ。マリヤ論全体に占めるキリスト教の優位性復権を求め、展開しなかつたならば、以後どのようなマリヤ論も展開しなかつたであろうことはあまりにも確かである。

マリヤを主題的に扱う議論は、「無原罪懐胎」「聖母被昇天」などの教義に集約されるように、かつてはカトリック神学の専有物であった。しかし、今日、マリヤはカトリック神学はもとよりキリスト教神学の枠組みそのものからも解放され、比較宗教学・民俗学・人類学・心理学などの幅広い観点や関心からも積極的にアプローチされる対象となつてゐる。マリヤはもはや救済主の母としてのみ語られる存在ではない。彼女は今や古代の母神と同一視されたり、人類に共通する何らかの心的原型の象徴とされたりする。さらにはまた、夥しい数の彼女の図像が収集され分析されて、彼女を崇拜の対象とした民衆の習俗や心性の解説が試みられることもある。こうした

要求に適うのが本書である。これまでプロテスタンティズムは新約聖書研究の実りある長い伝統を持ちながら、聖書の中のマリヤ伝承に焦点を当てることに対しては必ずしも積極的ではなかつた。そのような状況にあつて、自らもプロテスタンティズムの世界に属する著者が、新約聖書学の分野での研究成果を利用して、聖書の中のマ

リア伝承を分析・解説するのが本書である。

とはいえ著者の関心は、あとがきで述べられているように、決して新約聖書の領域に留まらない。著者が本書を書き上げることになった直接の動機は、むしろフェミニスト神学というキリスト教神学の新しい流れとの出会いから生じたものであるらしい。実際、本書はマリア伝承に焦点を絞って聖書を読み解きながらも、マリア伝承をフェミニスト神学の可能性をはかるリトマス試験紙と見立てて、フェミニスト神学に正面から向き合う姿勢を示している。そしてそれは時に厳しい対決にも発展する。それゆえ、本書もまたフェミニズムという新しい視点を意識した、もう一つの「マリアのヌーベル・キュイジーヌ」と言えるかもしれない。日頃とかく「フェミニズム」ないし「フェミニスト」という語の付いたものを敬遠している読者には、よりオーソドックスな叙述の方が好ましく思われるかもしれない。しかし、「もっと手前で踏みとどまるべきところをあえて一步踏みだし、価値判断を加えてしまった場合がいくつがある」本書であるからこそ、昨今の種々のマリア論には少々食傷気味で

あったはずの我々も、いつのまにか著者が展開するもう一つの議論の中へ引きずり込まれることになるのである。

本書の構成は二部よりなる。第二部はルカ福音書の第一章と第二章の注解であり、第一部の議論に参加する際の基礎的資料となる。この部分はそれ自体独立したものであるとして十分なヴォリュームを備えたものでありながら、聖書注解に馴染みの薄い読者にも親しめるように、中途半端な注を省略し簡潔な表現が試みられている。まずはじっくり第二部の注解から読み始めるもよし、あるいは、第一部の刺激的な議論に参入してから随時第二部を参照するもよし、読者は構成の後先に縛られる必要はない。

ルカ福音書の第一章と第二章が新約聖書におけるマリア伝承の核心と考えられるのは、以下の消去法による。新約聖書中、共観福音書と使徒行伝以外の文書には、「イエスの母」について語ることがあるにしても「マリア」という名前は現れない。したがって、まずこれらが除外される。次に、共観福音書中、マルコ・ヨハネ両福音書

にはイエスの生誕・幼児物語がないので、母たるマリヤの登場する機会も少ない。したがって、これらもまた除外することができる。一方、使徒行伝ではマリヤは一カ所でしか言及されず、その構成はルカ福音書記者に帰せられるので、結局、マタイ・ルカ両福音書が残されることになる。ところが、マタイは生誕物語以外ではマルコのマリヤ伝承を無意識に繰り返しているだけなのに対して、ルカには意識的な付加が散見する。したがって、マタイ福音書も除外されて、最終的に残るのはルカ福音書、しかも、イエスの生誕・幼児物語となっている第一章と第二章である。

後にマリヤが崇拜の対象となるのは、彼女が「処女性」と「母性」という二つの概念を象徴する存在として伝承されたからであるが、このような伝承がいかなる史実に基づくものであったかは、勿論、今となっては知るよしもない。ただ、処女懐胎モテーフはルカ福音書の段階で既に明白に自覚されている、と著者は言う。もともと、ルカ福音書は以前から伝わる処女懐胎の物語を採用したと考えられるが、著者によれば、ルカには単に既存の物

語を繰り返し採用しているだけではなく、そこにはマリヤ伝承に対する強いこだわりと、これを何とか美化しようとする技巧的努力が特徴的である。おおよそ美化の背後には、それと逆の方向をもった現実が想定される。処女懐胎モテーフがマリヤ伝承の意図的な美化であるとするれば、マリヤの現実とは逆に何らかのマイナスのイメージと結びついていたのではないかと著者は推測する。

マリヤ伝承におけるこのような美化・聖化のシステムをカトリシズム（普遍主義）本質論と関連させて、著者は次のような興味深い議論を展開している。カトリシズムの本質は「対立するものの包括」であり、自らに対立するものをいたずらに排除せず、むしろそれを自らのうちに抱え込むことによって自己発展することにある。そして、このカトリシズムの本質を実際に支えるのが、対立物を美化・聖化するシステムである。初期キリスト教団が意図的に処女懐胎モテーフを採用し、これを美化・聖化させていったのならば、彼らは自らの中にたえず欠如を自覚し、それを自らの中に包括し対立を回避しようとしたのであり、そこにはカトリシズムの萌芽が

認められる。この意味において、マリア伝承を含むルカ福音書、および、ルカ文書周辺の教団を「初期カトリシズム」と呼ぶこともあながち誤りではない。そして、美化・聖化のシステムをとおして、教団が無意識のうちにカトリシズムの本質を身につけていく過程は、決して何か積極的な教義によるのではない。そうではなく、むしろ絶え間ない現実の浸食によって、また、この現実との折衝によるのである。それだからこそ、「処女懐胎」のような言葉にすれば矛盾に満ちたモティーフも、この確かな現実感覚に裏付けられているがゆえに、確実に社会層の支持を獲得し増殖することになるのである。

さて、次にフェミニスト神学の問題に移ろう。

著者はまずフェミニスト神学が何を目指し、また、聖書解釈との間にどのような関係をもっているのかを明らかにしようとする。著者によれば、フェミニスト神学の主流派はキリスト教の内部に解放の根拠を見出し父権性の呪縛から救い出そうとするものである。したがって、聖書全体の枠組が父権性的思考形態をとっている以上、フェミニスト神学は聖書をすみずみ均等に尊重するよう

な立場とは相容れない。聖書解釈の主流が歴史的・批判的方法である以上、それとフェミニスト神学はうまく対応しない。それゆえフェミニスト神学は聖書解釈に影響を与えることがあるにしても、その逆、つまり聖書解釈がフェミニストの基礎になることは本質的に不可能である。ここから、著者は、フェミニスト神学は「護教神学」でしかありえないと主張する。概してフェミニズムはキリスト教に対して否定的である。単純に考えても「フェミニズム」と「キリスト教神学」はおおよそ互いに馴染まない。それゆえ、そもそもそこからフェミニスト神学の宿命的な性格、すなわち、護教的性格が生じてくるのである。フェミニスト神学はフェミニズムの潮流の中にあつて何とかキリスト教を正当化し、キリスト教とフェミニズムを調和させねばならないからである。

そこで、著者は、フェミニズムにとって好ましさからざる存在であるマリアを、フェミニスト神学に対峙させてみる。マリア批判はかつてのボーヴォワールの発言の中に的確に表現されている。「母なる処女」マリアとは、女性の肉体を蔑視し息子に従属する母という形においての

みその生を認められるものであり、男性にとって好都合な女性のモデルではない、というのがその趣旨であった。およその今日のフェミニズムも、マリアに関してはボーヴォワールとはほぼ同意見と思われるが、一方、フェミニスト神学は彼女らのようにマリアを否定し無視することもできない。しかも、マリアは簡単に料理できるものでもない。なぜなら、マリアは処女性と母性という互いに矛盾する概念を同時に抱えているからである。母性が強調され評価されれば、女性原理を全面的に肯定することになり、処女性が強調され評価されれば、男性固有の役割を拒否し性差の否定へと進むことになる。著者がマリア伝承はリトマス試験紙である、というのはこの意味においてである。

結局、フェミニスト神学はどうするのか。マリア伝承に目をつぶり、マリアの問題などに触れないのが一番賢明に見える。しかし、著者はこのような立場をよしとしない。それは、自らにとって都合の悪いものを留保したまま、フェミニズム一般に対してキリスト教も結構よくやってきたのだと弁護しているに過ぎない。そのような

ものはフェミニズム一般に通用しない、と著者は考える。フェミニスト神学が仲間内だけの、一握りのお客相手の商売で終わるのだとしたら、何の意味もないと著者は主張しているのである。

「……もしフェミニスト神学に何らかの意義があるとすれば、それはフェミニズム全体の見取り図の中で特定の地位を占めるものとならなければならない。つまりフェミニズムの流れに自らの視点から貢献するのでなければ、キリスト教外の世界における市民権は得られないのである。それは必ずしもキリスト教独自のフェミニズムを主張するということを意味しない。むしろ一般のフェミニズムの流れの中でキリスト教の立場を相対化し、その問題点を率直に認めつつも、歴史的に保持してきた自らの伝承の特殊性によって、フェミニズムの一部にながしかの新しい資格をつけ加えることができれば、それだけでよしとしなければならない。……」

著者の予想では、エコロジカル・フェミニズムの路線を越えないことがフェミニスト神学の限界となる。著者は、「産む性」という女性の動かしがたい現実を根を張っ

ているエコロジカル・フェミニズムのしぶとさ・強さを十分認めながらも、これをフェミニズム全体の中にあつて必ずしも高く評価しているわけではない。フェミニズムのある路線が遥か先に進むことができるとしても、フェミニスト神学はそこに到達することはできないだろう。著者の苛立ちは、フェミニスト神学がそうした自らの限界にこれまで鈍感であり、またその鈍感を許す土壌が（日本の）プロテスタンティズムの中にあることに起因するようである。せめてマリア伝承のような歴史的素材が自らの限界を見据える契機になること——これが著者の自戒も含めた警告である。